波はゆっくりと陸へうちよせ、陸の緑は波のようにゆれていた。うねりを描き、緑は空へもりあがる。半年ぶりのシペチャリの山なのだ。山よもぎの黄色い花、紫色の露草の花、山ごぼうの白い花もそこには咲いているだろう。汐風をあびて斜面を指す曲がりくねった柏の枝もあれば、ぶどうづるにからまれてだらりと下がるやちだもの枝もあるはずだ。しかし、こうして海から眺める時、それらの花、それらの枝ぶりは消しさられ、緑だけがひた

すら空へうねっているのだ。

「おれたちは、どこへうねっていくのだろう」

おれがつぶやくと、母はあかるい声で言った。

「シペチャリ　ウン　パイエアン　ナレ

わたしたちはシペチャリへ行くのだよ、というほどの意味である。

おれは運命について考えていたのだ。あの緑の中に住む一人一人のアイヌ、そこで生まれた母のリカセ、母をめとった父の庄太夫、そしてまた、おれたちとこうして船旅を続けてきたアイヌ相手の商人や、父の輩下の鷹待たち――それら一人一人の喜怒哀楽をまとめあげて、歴史はどこかへうねっていくのだろうか。うねりのはてには、あの天空のように窮りない未来が約束されているのだろうか……そんな思いでつぶやいたおれの言葉は、母の心にとどかない。ネコナン　スクプ　カムイウタル　イコレ――神々はおれたちをどのように育てるのだろう、と、そんな意味のア

イヌ言葉がおれの唇からもれていれば、母の言葉は少しはおれに寄りそっただろう。そのつぶやきが出なかったおれは、和人の一人であるのだろうか……

「さあ、土をふめるぞ」

船頭と世間話を続けていたはずの父が、いつの間にかおれと母の間に立っていた。水主たちの動きがはげしくなる。船荷の主、阿倍屋の支配人は、積荷の米俵を掌でたたいていた。

打出の小槌をふるような彼の腕の動きである。七升入りの俵であった。おれが通辞になったころ、俵は二斗入りのものだったのだ。その半分にもたりない俵で、前と同じ五束の干鮭を商人はアイヌに望むのだった。

「シペチャリか」

鷹待三人の声が重なる。これから半年の思いをこめて、おれたちのたむろする船首の方に三人は寄ってきた。父を含めて四人の鷹待は、鷹狩の鷹を捕えるために、夏から秋をこ

のシペチャリで働くのだ。松前藩鷹待部屋に御奉公をする四人の身分なのである。

船は河口に入った。晴れあがった日だというのに、川の底は見えない。川上に入った和人たちの砂金採りのためである。砂ごと掘りとる和人の仕事は川を汚し、卵を産みつける鮭の領域を侵していた。漁は減り、それでも律儀に、アイヌは二十匹の数を減らさず、千鮭を一束にたばねて交易をするのである。

左岸の崖が近づいてきた。崖の下から、風になびいた蘆の動きが川にひろがる。

「おかしい」と、父が言った。蘆の動きをかきわけて迎えに出るアイヌの姿は一人も見えない。

「ウタル、いた」

母が崖の上を指して言った。チャシとよばれるその崖はアイヌの砦であり、祈りを捧げる場所である。そこから船を見下している一つの人影がふりむくと、人の姿はたちまち増え、叫び声が重なった。

「シサム　ロンヌ。シサム　ロンヌ」
声の下に近づいた櫓のきしみが急にとまり、叫び声はいっそうはっきりと耳にとどく。櫓をこぐ手を止め、水主たちは息を呑んで船頭を見つめた。通辞のおれの助けがなくても、アイヌの叫びの意味するものを水主たちは聞きとっていたのだ。
「シサム　ロンヌ。シサム　ロンヌ」
和人を殺せ、とアイヌは叫ぶ。いや、和人ではなく、和人たちだった。シサム　ライケ、ともし彼等が叫んだのならば、それはおれたちの中の一人をめざしての言葉である。しかし、今の彼等の叫びの意味は、一人をめざしてのものではない。
「沖へもどろう」と、阿倍屋の支配人があおざめた顔で言った。船頭が言葉を探す。
「わしをおろしてくれ。ともかく様子をたしかめてくる」と父が言った。
「父上、この松右衛門もまいります」と、おれは低い声で言った。アイヌ言葉の達者でな

くはない父だが、おれは通辞としてこの船に乗っているのだ。

母の言葉が、おれの隣でうわずった。

「わたし、ひとりいく」

「三人で行こう。親子三人」

母の言葉をしりぞけると、父は唇を噛んだ。錨の綱がきしみ、船が止まる。艫が大きく輪を描きながら、川上に向かって動いていった。船首が沖に向き、水主が一人川にとびこむ。川に打ちこまれた大きな杭に艫綱を巻きつけ、

る水主の腰はすわらなかった。

船べりから杭へ板がさしだされた。

「庄太夫殿」

残る鷹待の低い声が大気をつたわる。

「心配することはない。わしはシペチャリの長シャクシャインの娘婿ではないか。手出しをすることなど考えられない」

そう言う父の言葉はひきつっていた。このあたりのアイヌから、タッタインとよばれる父である。母の父シャクシャイン、あるいは

また、二百余年の遠い昔、松前の藩祖武田信広に討たれたコシャマインの名であきらかなように、父のアイヌ名には敬いの言葉がこめられていた。タッタインとはタトアイヌ、樺の皮の人という意味であり、アイヌとは、彼等にとっての敬称でもあった。しかし、いくら首長の娘婿とはいえ、和人である父をアイヌはわけへだてなく受け入れているのではない。樺の皮の人、という言い方には、辛辣なわけへだてがあった。アイヌのような豊かな体毛を持たぬ父のからだを、アイヌはつるりとした樺の皮にたとえているのだった。父の言葉のひきつりには、十分なわけがあるのだ。

板をふむおれの足もひきつっている。母は板からとびおりると、蘆の中に走っていった。

「ウタル　ウタル。リカセ　ネ　ワ。リカセ　ネ　ワ」

二つの腕をつきあげ、母はチャシに向かって名乗った。

「イランカラプテ」

「イランカラプテ」

チャシの叫びは、なつかしの言葉に変わった。母は植のように神をひろげ、おれたち二人の前を行く。

首一つ高いアイヌの姿が、むらがりの中から突き出ていた。頭にのせた輪の白さが、白髪のまじった髪を隠している。ぶどうづるの皮を編み、楊の木肌を削って巻いたサパウンペであった。祈りの時、それを司るアイヌの長は必ずそれをかぶるのだ。

「ミチ」と、母はシャクシャインを呼んだ。サパウンペの下の表情を見分けるには、チャシは高かった。しかし、傾きを見せぬ祖父のからだと首は、祖父の視線がおれたちの頭を越えていることを示すものだった。鋪をおろしておれたちを待つ船の位置をも越えていた。おれたちの発ってきた遠い福山に向かって、祖父の目は注がれているようであった。

せせらぎの音がした。母のわらじが草をさばき、細い流れに沿った石くれの上にとびお

りた。小川の流れは樹々の葉で翳り、チャシの人々はおれたちの目からうさえぎられていた。

「シサムころせ、冗談(じょうだん)だ」

そう言う母の足どりは軽かったが、男二人は母に遅れる。遅れてなどいられなかった。和人を殺せというアイヌの叫びは、冗談ではないだろう。これほどアイヌが高ぶっているとは思わなかったが、今、おれたち和人が殺されてしまうことは、松前藩とアイヌの関係をどうしようもなくしてしまうことに間違いなかった。

なかが一介の通辞にすぎないおれではあるが、おれはそれを食い止めなければならない。おれは鳥だ。アイヌと松前をつなぐ鳥になろうと心に決め、通辞になったおれなのだ。

熊笹の生い繁る崖をよじ登ろうとすると、蝉しぐれにまじったざわめきの音が聞こえた。

「ウタル、リカセ ネ ワ。リカセ ネ ワ」

母は叫びながら、リスのように登っていく。

「リカセ、イランカラプテ」

「イランカラプテ、リカセ」
母を迎える人々の言葉が、木洩日に乗ってふりそそいだ。
堀がある。幹を倒した橋の上をおれたちは渡った。もう一つの堀の橋を、群れから抜けた一人の男が渡ってくる。母の弟、カンリリカであった。
「オシッパ」
祖父の声がした。カンリリカの足が止まり、その表情から笑いが消えた。

「オシッパ」
広場の中央に設けられた祭壇の前で仁王立ちになった祖父の声はとどろいてくる。もどれ、と祖父は言うのだ。それはカンリリカや、群がるアイヌたちへの言葉であり、おれたちへの言葉のようでさえあった。
丸木橋の上で肩を落し、カンリリカはゆっくりと向きを変えてもどっていった。橋の向こうのアイヌの群れも、ざわめきを残してもどっていく。

母の足がカンリリカを追った。
「リカセ、オシピ」と、祖父は母を拒んでいる。母の足は叫びに逆う。
「シサム、オシピ」と、言葉を変えて祖父は拒む。母は棒立ちになった。和人はもどれと祖父は言うのだ。
「リカセ、ここですわって待とう。祈りがはじまるのだ。おれたちの行く場所ではない」
父の言葉が母の背中をとうえた。丸木橋の上を母はくずれるようにもどってくると、父の前に倒れた。赤い腰巻の下から草のように豊かな毛をのぞかせ、母の足がもだえている。
「エアニ　アイヌ　クネ」
あなたはアイヌなのだという母への言葉が、おれの喉から思わず流れていた。
「イヤイライケシ」
感謝の言葉といっしょに、母はおれの両手をにぎった。
「エアニ　アイヌ　クネ」と、おれは同じ言葉であやしながら、母の上半身をおこした。

祭壇の前にすわる群れの中から、風のようにふるえる声がした。姿は見えないが、おそらく祖父の声であろう。ふるえは次第にはげしさを増し、竜巻のように舞いあがる。天空を突き刺すほどの甲高い叫びは、祖父にのりうつったアイヌの神の叫びであった。母のからだが小刻みにふるえはじめた。

「ウトウの死んだことを語っているな。なぜだ。なぜそんなことを」

父がつぶやくように言った。

「ウトウは松前の殿に毒を盛られて死んだ。黙っていては、ウトウのように、すべてのアイヌは殺されていく。このままではいけない。身を守るために、今こそアイヌは戦わなければならない――そのように聞きとりましたが」と、おれは叫びに耳をかたむけながら言った。

「馬鹿なし」と、父は悲しそうにつぶやいた。

ウトウは、シペチャリ川の向こう岸で勢力を持つオニピシ一族の一人である。

八年前のことだ。蝦夷地の地図を作るた、

オチマス……

「ちりっ　ちりっ　ちりっ　ちりっ、

キレイナ空タ

遊ポウ　遊ポウ

キレイナ草タ

遊ポウ　遊ポウ

ちりっ　ちりっ　ちりっ　ちりっ」

鳴声響カセ、タクサンノ雲雀、飛ンテイマス。オレ、チイサナ声テ鳴声マネマス。突然、雲雀、姿カエ、鳥、空クロク、オオイマス。

アホウ、オ前ナンカイッテシマエ、ト、オレイイマス。羽ノ音響キ、嘴ムケテ、鳥ノ群レ、マイオリテキマス。コワイヨウ、ト、オレ、大声テ叫ピマス。鳥ピックリシテ逃ケテイキマス。オレ、声タテテ、ワライマス。向キ変エ、鳥マタ、オソッテキマス。コワイヨウ、ト、オレ。鳥逃ケ、オレ、マタワライマス。ワラウ、叫プ、ワラウ、叫プ。ヤアメタ、ト、オレ言葉カエルト、鳥ノ姿ミエナクナリマス。カラッポノ空サミシイ。オオキナ声テ、オレ、

ワラッテミマス。鳥キマセン。オレ、ワライ続ケマス。鳥キマセン。ワライ、ウメキミ変リマス。汗ピッショリ。ワルイ夢テス。ワルイ夢、隠セパ駄目テス。ワルイ夢、シャペラナケレパナリマセン。シャペッテ、蓬ノ葉テ、オハライシテモラウノテス。ソレ、あいぬノナラワシ。テモ、何処カラ何処迄、夢ナノテスカ。イキテイルコト全部、ワルイ夢。シャペリマセン。はろう、我慢シマス……

一族と一族のつばぜりあいのはて、オニピシが殺されたのは昨年のことである。

暮、思いもかけぬピポクのハロウが、福山へおもむいてきた。子ども同士のころ、妙なきっかけからおれと友だちになり、和人の言葉を使えるようになった彼である。そんな彼の肩には、オニピシ一族の期待が背負わされていた。シャクシャインと戦うための武器を貸してほしいと、役人に願い出るためにやってきたハロウなのだ。

「おれの通辞、おまえやるのか」
役人に会うという日の前夜、居酒屋の片隅でハロウはおれに言った。
「おれではないが、おまえに通辞はいらないだろう。そのために選ばれてきたおまえではないか」
「おれ、おまえと遊んで、言葉覚えた」
「そうだったな」
「おれの言葉、おまえたけにしか通ちないよ」
「そんなことはない。それだけ話せたら立派なものだ」
「違う。言葉に、こころ、いる。こころ通ちないあいてに、言葉通ちない」
「……」
「おれ、ゆみもへた。やりもへた」
「下手なのは、おれも同じだ」
「おまえ、ゆみ、やり、つかわなくて、いきていける。おれたちアイヌ、えものとらなければ、いきていけない。えものとる場所、とりあい、シャクシャイン一族と、オニピシ一

族、あらそってしまう。でも、ゆみとやりのへたなおれ、やくにたたない。そのおれ、初めて、みんなにたのまれた。あにのノウシラ、初めて、おれのこと、ハロウと呼んで頼んだのです。道のようにくねったおれのこころ、おやくにんに届かないです」

「通辞を介してしまっては、おまえの心はもっと届かなくなるぞ」

そう言ってしまうと、おれは自分の言葉を心の中で噛みしめていた。もし、おれがハロウの通辞をしたとしたら、私情を排してのぞめるだろうか。おれの祖父を撃つための武器を貸せというハロウの言葉に――

「届かないほう、いい。おれ、あらそい御免たよ。なあ、まつまえとなかよくして、何故わるい。えものとる、やり、矢尻。きものぬう、はり。御馳走にる、鍋。てつの道具、みんな、まつまえのふねもってくる。シャクシャインも、それつかっていないか」

「――」

「まつまえ、きにくわないなら、道具みんなすてて、ふるいくらしに戻れぱいい。それも出来ないて、まつまえとなかよくするおれたちのこと、シャクシャイン何故馬鹿にする」
「心の通じない相手に、言葉は通じないとおまえは言ったな」
「……」
「言葉をかわし、物と物をとりかえても、そこに心がなかったならば、哀れなことだとおれは思う」

ハロウの裂けた唇が、音をたてて酒をすする。おれも手荒く盃をとった。
武器一つもらえず、ハロウがピポクへ発ったのは、それから数日後のことだった。
「通辞のしにくい奴だった。アイヌ言葉の中に、和人の言葉をわざとらしくまぜてしゃべりまくるもんだからな、はて、聞きなれぬアイヌ言葉よと、何度くりかえしてたずねたものか」
ハロウと役人の詰合いを通辞した同輩は、

おれに言ったものである。

頼りないハロウにかわって、オニピシ一族がふたたび使いを福山へ出したのは、年の明けたこの四月である。ウトウという男であった。役人になだめられ、同じように帰されたウトウが旅の途中で熱をだし、死んでしまったという噂を耳にしたのは、半月ほど後のことだった。

――――父の声がした。

「船のことも申しているぞ。おれたちの船を

「和人の船を奪い、その船でまずシコツを襲え」

「たしかにシコツと、わしにも聞こえた」

神の叫びには智恵があった。陸路を福山に攻めのぼれば、まずオニピシ一族の村々を通りすぎねばならない。戦いはそこではじまり、そこで足止めをくらうだろう。海路を利用し、オニピシの村々の先にあるシコツに上陸するということは、まことにすぐれた戦略である。しかも、船足の速いおれたちの帆船を使えと

アイヌの神は述べているのだ。
虹のように叫びが消え、蝉の音だけが響きわたった。それを掻き消し、アイヌの歓声がわきおこる。女たちは立ちあがり、酒盛りの用意をはじめようとしていた。
女たちの間を縫い、低い姿勢で走ってくるのはカンリリカだった。丸木橋をとぶように越えると、カンリリカは父の手をとった。二人はゆっくりと、たがいの手をさすりあった。
「タッタイン」と、カンリリカは父のアイヌ名を呼んだ。
「わしは、庄太夫だ」と、父はつぶやくように言った。沈黙が二人を区切った。息を吸い、カンリリカは苦しそうな表情で言った。
「しょたゆ、チプ　コラル」
船を引渡してもらいたい、と彼は言うのだ。あなたたち船の人々とは争いたくない。戦いは一族の意志ばかりではなく、神の意志で決まったことなのだ。わかってもらいたいと、カンリリカは訴えながら目を血走らせていっ

た。

お前はシャクシャインの使いなのかと、アイヌ言葉で、父は瞑想をしながら言った。違う。しかし、同じことをシャクシャインも言うだろうと、カンリリカは答えた。そうだろうと、父の瞑想は続いている。

「トネン　ウントゥウシと、おれは祭壇を指して言った。どうしても、そこにおれたちを連れていってもらいたい。どうしても、祖父と話し合わねばならぬのだ。瞑想などをしている時ではないはずだった。

草の上から、母がおれたちを見上げた。母の前に膝をつき、カンリリカは手をとった。黙って手をさすりあい、二人は挨拶をかわしている。

手をとったままカンリリカは立ちあがると、背中を向けた。背中がおれたちを呼んでいる。

「父上」と、おれは父をうながした。

祭壇に向きあったまま、あぐらの祖母は目を輝かせていた。荒い息でからだがゆれる。

頭にかぶるサパウンペの先にとりつけられた鷲の嘴が、命のようにゆれていた。

地蔵参詣のころになると、かもめはどこかへ飛びたってしまう。どこへ行ったと、子どものおれが尋ねたうすなアイヌ言葉で問うと、神の国へ行ったのだと母は教えてくれたものである。母にとって、鳥は神、けものは神、樹も水も、ありとあらゆるものは神であり、姿を変えてこの世に現われているのだった。

白神崎が見える辺りで、